

## エンリケ 4 世の王位継承戦争におけるプロパガンダ (1457-74年)

大 原 志 麻

### はじめに

エンリケ 4 世の王位継承問題は、中世政治史の中で、最も注目されてきた問題の一つである。20世紀初頭のシッチェス<sup>1)</sup>を皮切りに、エンリケ 4 世の跡を継いで即位したイサベルの正当性に疑義が唱えられ始めた。1930年には、医者兼歴史家であるマラニョン<sup>2)</sup>による、エンリケ 4 世の性的不能についての医学的研究が出され、この問題に一石を投じた。1960-70年代、スアレス・フェルナンデスとビセンス・ビーベスを中心とした論争<sup>3)</sup>を経て、「エンリケ 4 世の性的不能は相対的なものであり、フアナは、エンリケ 4 世が婚姻継続中に生まれているので、王の嫡子とみなすことができ、王位継承権を有していた」という見解が、通説として認められた。

しかし、実際に即位したイサベルの王位継承が、いかに実現されたかという問題は、今日においても未解決のままである。すなわち、イサベルの即位は、いかなるものに基づいて合法性を獲得したかという問題である。実際この時期は内乱期であり、法源となりうる実定法<sup>4)</sup>、条約<sup>5)</sup>、同盟<sup>6)</sup>、遺言<sup>7)</sup>がことごとく否定されており、王位継承をめぐる法が一般的に尊重されていたとは考えられない。エンリケ 4 世期カスティーリャは、フアン 2 世の法の拡大解釈に端を発して、法執行がきわめて不安定な状態におかれていた。また血統上の問題に、より力点がおかれていたために、法に決定的な意味を持たせていたわけでもなかったことが、イサベル即位が「不確かな継承」とみなされている要因であろう。

「イサベルの即位は、結局反乱貴族による軍事的勝利である」とみなす見解<sup>8)</sup>も存在する。しかし実際のイサベル派勢力は、1468年9月のギサンド条約以降、トレド大司教、エンリケス家、マンリケス家

のみとなり、軍事的に優勢であったとはいえない。したがって、イサベルの即位が軍事力により実現したとも考えがたい。

ここでは、エンリケ 4 世の王位継承抗争を、より広い社会的文脈のなかで捉え、これまでとは違った意味で史料を捉えなおしていくことによって、イサベル即位の正統性について考察したい。この再検討のキーワードとなるのが、プロパガンダである。

これまでの研究においては、エンリケ 4 世期またカトリック両王期においても、この王位継承に関する記述は、偏ったものとされていた。すなわち、軍事的にイサベルが勝利を収めた後、イサベルの立場を正当化するために、エンリケ 4 世を否定するプロパガンダを行う必要があり、後の年代記などにおいて、反エンリケ・親イサベルの記述がなされたというのである。しかし1464年から1474年に及ぶ内戦において、実際に軍事衝突があったのは、1467年8月20日における、3時間のオルメドの戦いだけである。つまり武力によって抗争は終結をみなかったものであり、当時の記述のあり方、プロパガンダについては、再検討する必要があると考えられる。

中世カスティーリャにおける、王権に関わるプロパガンダについては、ニエト・ソリアを中心に研究されてきた<sup>9)</sup>。しかしこれまでの研究は、図式的な範囲を出ておらず、しかも中世後期を一括して取り扱っており、時代性を軽視している。また、支配層の視点のみから研究され、「下からの影響」は等閑視されたままである。

「民衆の声」は記録されていない。そのため伝来史料に基づく方法論からは、プロパガンダの受容者としての民衆の役割は解明できないものとされてきた。つまり、どのように受容され、影響力を持ち得たのかというプロパガンダの有効性を考慮せず、「できる限り多くの人々」に情報を流布させること

が、プロパガンダのあり方であるという固定観念にとらわれていたのである。その結果、プロパガンダの構造解明が曖昧にされたままであることは否めない。また、受容者たる民衆が持つ集団心性の存在意義も、仮説の枠を出ていない。これは、中世カスティーリャにおけるプロパガンダ研究が漠然とした抽象研究にとどまっていた、特定の事件に着目した事例研究がこれまで行われてこなかったためであるといえる。そこで、プロパガンダが持つ意味に注目する研究の立場からも、エンリケ4世の王位継承抗争における具体的なプロパガンダのあり方をみていくことは、有益であると考えられる。

エンリケ4世の王位継承抗争は「見えない戦争」によって争われた。それゆえ、この問題は、それぞれの党派がもつイデオロギーが、どのように実践されたかを理解する好例であるといえる。イデオロギーが、そのまま実践されることはない。プロパガンダを目的として、利用可能な形にアレンジされ、用いられる。このときに底流にあるものが表出するため、時代の思想的・心理的実態を探るのに格好の素材である。また、エンリケ4世期の王権の弱体化は、いわゆる「表現の自由」を許したため、様々な立場からの豊富な議論がなされた。したがって政治のあり方をたどる宝庫でもある。

プロパガンダの範囲は、王権・貴族間のイデオロギーを通じた利害抗争だけに留まらず、都市や村々にも及ぶ。このことは、諸地域がエンリケ派・イサベル派に分かれ、内乱に参加したことから理解できる。このように、社会の上層のみならず、中下層にも広がるプロパガンダは、社会の上層・中下層の間に相互作用を生み出した。このような上下の相互作用がみられる事例を取り上げ、研究することにより、これまで無視されてきたプロパガンダの具体的な構造解明を試みるのが可能である。それを通じて中世末期の社会の一端を描き出すことが、本論文の目的である。

## I 上層階級におけるプロパガンダ：エンリケ4世の廃位をめぐる議論の形成と言説空間

貴族のエンリケ4世に対する反乱は、よりよい恵与の獲得を目的としており、各家門単位の利害に基

づき行動したとされる。それぞれの貴族の動機については、スアレス・フェルナンデス、バル・バルディビエソの研究が関説している<sup>10)</sup>。

エンリケ4世の王位継承争い時には、貴族は大きく分けて三党派に分裂した。それぞれが高次のイデオロギーに基づいて行動していたわけではないが、王に敵対する場合、反乱を正当化するための大義名分は必要であり、周到に練られたプロパガンダが、さまざまなメディアを用いて流布された。

『七部法典』に定められた王としての行動規範は、15世紀に、王権プロパガンダとして「告知」<sup>11)</sup>され、オルメドのコレテス<sup>12)</sup>などを通し、繰り返し広められてきた。王の行動規範は、神学者により定められ、「徳高き王」「キリスト教の王」「法の主人」「戦闘的な王」など27項目に分類されている<sup>13)</sup>。

これら王権正当化の議論は、エンリケ4世がこのモデルに当てはまらず、王として相応しくないとして、反乱貴族により逆利用された。反乱貴族による自己正当化の論拠は、1457年から1464年までに固められた。この時期は、エンリケ4世の廃位、対立国王「アルフォンソ12世」を擁立、1464年のアビラの三文芝居事件により、貴族反乱がクライマックスを迎える時期である。神学は学問の領域に留まらず、このように政治的正当化の武器として取り上げられ、アレンジされて、党派間の抗争において用いられた。

1457年10月16日の対グラナダ戦争の休戦条約を機に、トレド大司教、サンティリャーナ侯によって、エンリケ4世に対し、最初の神学的論拠に基づく「請願」<sup>14)</sup>が出された。この「請願」は、国内で発表されると同時に、教皇庁にも送付された。「廃位」の前例があるとはいえ、貴族に王を「廃位」する権限はなく、貴族たちは教皇の後盾を求めたのである。

1457年の「請願」をもとに、再度1460年「王国が醜聞により受けた被害を回復するため」トレド大司教、サンティリャーナ侯、ファドリケ・エンリケス提督などが結集して、エンリケ4世への「請願」<sup>15)</sup>がなされた。そして、1462年トレド大司教、ビリエーナ侯、カラトラバ騎士団長を中心に、トレドのシスラ修道院で反エンリケ派による集会<sup>16)</sup>が持たれ

た。ここで、「請願」の内容が練り直された。同年7月20日、年代記作者バレーラは、ペドロ1世を筆頭に過去に廃位されたカスティーリャ内外の王たちを例に挙げて、エンリケ4世への批判<sup>17)</sup>を強めた。

この時期エンリケ4世に寄せられた「請願」の要点は、主に4点に整理することができる。第一点は、「異教の王」、そして第二点は「臆病」という批判である。対グラナダ戦争を、グラナダ王の差し出す富により休戦協定を結んだことを根拠とした批判であることはいうまでもない。これを是正し、キリスト教を尊重して、イスラム教徒を懲罰すること、そして、教会に対する迫害をやめることなどが、エンリケ4世に要求された。

第三点は、「法の軽視」である。ここでは、臣下の意見の無視、先王の未亡人イサベル王妃への不当な処遇、アルフォンソ王子を差し置いて、「王妃の娘」フアナを王位継承者としていることが根拠となっている。それを改め、遅滞している戦争功労者への報奨授与が王に要求された。

第四に、なによりも大きな意味を持った批判は、王が「性的不能者」であるという批判である。これは実証不可能な問題である。しかし、王の性的不能は娘フアナの正統性否定につながるために、最大の論争点となるべき批判だった。

1462年8月11日から、エンリケ4世がアラゴン王フアン2世と敵対するようになったため、エンリケス家、トレド大司教<sup>18)</sup>は、決定的な反エンリケ派となった。これにビリェーナ侯が加わる。1463年4月23日に一旦和解するが、1464年エンリケ4世がベルトラン・デ・ラ・クエバにレデスマ伯位を与え、空位になっていたサンティアゴ騎士団長位を授与するとの噂が広がったため、大貴族の行動が先鋭化し始めた。1464年5月16日にトレド大司教、ビリェーナ侯を中心に再度貴族同盟が結ばれ<sup>19)</sup>、「請願」が再提出された。1464年7月16日に、この同盟にアラゴン王フアン2世が加わる。

1464年のメンドーサ家<sup>20)</sup>を除く大貴族による集会、1464年9月21日ブルゴス評議会<sup>21)</sup>、1464年12月11日におけるメディーナ・デル・カンポの裁定<sup>22)</sup>後の「請願」には、新たな要素がみられる。王位継承者フアナは嫡出子ではなく、王妃とベルトラン・

デ・ラ・クエバの娘であるとするベルトラーネーハ説が強調されたばかりではない。公証人の臨席による公開初夜廃止など慣習軽視への批判、ベルトラン・デ・ラ・クエバの宮廷からの追放要求、エンリケ4世が篡奪しているアルフォンソ王子の権利の回復要求、悪貨鑄造などの新たな批判が、この時期続出した。

ブルゴス評議会に出された「請願」では、これまでと同様の条項に加え、「エンリケ4世は対イスラム戦争のための、80万デューカードを一部無益に費やし、一部を着服した。また先のカスティーリャ王フアン2世の遺言を無視して、アルフォンソ王子ではなく、ベルトラン・デ・ラ・クエバにサンティアゴ騎士団長位を与えようとしている」<sup>23)</sup>との批判がなされた。これらの新しい要項を加えた反国王派新文書が、教皇に送付された。同時に反エンリケ派年代記作者パレンシアはローマへ赴き、直接教皇に会い「請願」を認めるよう要請した<sup>24)</sup>。これに対し、エンリケ派も反論を開始し、年代記作者エンリケス・デル・カスティーリョがエンリケ4世の正統性、反乱者たちの愚について、貴族やエルマンダーの各指揮官を前に演説した<sup>25)</sup>。

ブルゴス評議会による新たな「請願」の結果、1464年12月13日、エンリケ4世は、ベルトラン・デ・ラ・クエバに対し、サンティアゴ騎士団長位の放棄<sup>26)</sup>を命じ、アルフォンソは王位継承者として承認されることとなった<sup>27)</sup>。

1465年1月16日にメディーナ・デル・カンポの裁定に対し、エンリケ4世が貴族の「請願」に譲歩するかたちで、「アルフォンソの立場の保証、アルフォンソはフアナと結婚すること。イサベルが王国の三身分の同意がない限りポルトガル王と結婚しないこと」を条件に和解<sup>28)</sup>する旨の書簡を送り、エンリケ4世とビリェーナ侯が、シマンカスの会見で調印した<sup>29)</sup>。

しかし1466年トレド大司教は、さらに教皇パウロ2世に、「アルフォンソ12世の正当性、エンリケ4世による王国の混乱と醜聞」についての書簡を送った。そこでパウロ2世は、1467年カスティーリャの内紛を調停するため、教皇特使ベネリスを派遣した。

1466年から、エンリケ4世は、初めて本格的に自分の正当性を主張する決意をし、神学者フランシスコ・デ・トレドに命じ、親エンリケ派の主張の文書を作成させ、その説教をさせた<sup>30)</sup>。時を同じくして1466年、「アルフォンソ12世」も、アンブリアス司教アントン・デ・アルカラその他神学者に自分の正当性を主張する文書を作成させた<sup>31)</sup>。1467年には、エンリケ4世と反乱貴族の間で幾度となく話し合いが持たれた。その中でエンリケ4世は、「アルフォンソの王位継承は認める。自分の統治権は正統なものであり、自分は王国に平和を与えたいだけである」と主張した<sup>32)</sup>。

1467年9月13日エンリケ派である教皇パウロ2世の意向に反して、教皇特使ベネリスは、貴族にアルフォンソ12世への服従を命じた<sup>33)</sup>。しかし程なく主要貴族はアルフォンソ派から離れ、エンリケ4世が正統な王として再承認される。一方のアルフォンソもその死まで、王を名乗り続けた<sup>34)</sup>。

エンリケ4世は、1466年まであえて自己の正統性を主張せず、プロパガンダに熱心ではなかった。それまでのエンリケ4世は、反乱貴族によるプロパガンダに対し、無視か、軍事的対応で答えた。エンリケ4世は自己の正当性に自信を持っており、あえてそれを公表する必要を感じていなかったと思われる。他方アルフォンソ派は正当性に瑕疵があるためエンリケ4世批判プロパガンダを繰り返した可能性を否定しきれない。ともあれ「アルフォンソ12世」プロパガンダが、王国全土に広がり、次のイサベルによる反エンリケ派のスタンスに、大きな正統性の論拠を与えたのである。

## II イサベルの王位継承権の合法性をめぐる議論とプロパガンダ

1468年7月5日「アルフォンソ12世」が死去した。アルフォンソの死後、反乱貴族に残された唯一の切り札はイサベルであった。イサベルが選択したのは「アルフォンソ12世」の直接の後継者ではなく、エンリケ4世の王位継承者になるということであった。エンリケ4世を廃位し、その後を「アルフォンソ12世」が襲ったのであれば、次に「アルフォンソ12世」の後継者としてイサベルが女王として即位す

るべきであり、エンリケ4世の王位継承者となるのでは筋が通らない。このことは、エンリケ4世に譲歩せざるをえないほどイサベル派が不安定であり、イサベルが女性であるゆえに対立国王として最良の存在でなかったことを示している。イサベル派の主張も、これまでのアルフォンソ派の主張を継承しながらも、もっぱらエンリケ4世の性的不能とフアナがベルトラネーハであるということ、エンリケ4世への服従に主眼をおいたものとなっている。

1468年9月18日のギサンド条約で、トレド大司教、サンティアゴ騎士団長など、大貴族のほとんどがイサベル支持派にまわった。ギサンド条約によるイサベルの王位継承権承認の知らせは王国全土に送付された<sup>35)</sup>。ギサンド条約は、「王と王妃は、合法的に結婚していない。そのため王国に正統な後継者がいないという事態を避けるために、イサベルを王位継承者とする。イサベルは、王、トレド大司教、ビリェーナ侯、プラセンシア伯の同意の下に結婚相手を決めること」<sup>36)</sup>というものであった。

しかし、ギサンド条約締結直後、ビリェーナ侯、カラトラバ騎士団長がエンリケ派へ移行した。1468年9月16日ブイトラゴで、メンドーサ家の庇護の下、フアナ王妃がイサベルの王位継承権の承認について異義を申し立てた<sup>37)</sup>。エンリケ4世は、イサベルの支持基盤が非常に不安定であると見て取り、1469年オカーニャのコルテスで、イサベルの王位継承権を否認した。

これを受けて、1469年10月12日、イサベルは、フェルナンドとの結婚に関する弁明を王国全土で行った<sup>38)</sup>。1469年10月18日トレド大司教は、教皇シクストゥス4世が、イサベルの結婚を祝福した旨を王国全土に公表した。1470年フアドリケ提督は、エンリケ4世の悪政、キリスト教の軽視などを批判する文書を発表<sup>39)</sup>したが、わずかな賛同者しか得られなかった。1470年2月にイサベルとフェルナンドは、エンリケ4世の王位継承への同意を得るべく、「王位継承権、フェルナンドとの結婚の正当性、平和の希求、エンリケ4世への服従」を表明した書簡を発表し、王国全土に送付したが、エンリケ4世からはなんの返答も得られなかった<sup>40)</sup>。

1470年のバリエ・デ・ロソヤの宣誓で、エンリ

ケ4世は、フランス大使に対し「王国の平和のために、イサベルの王位継承権を承認したが、その後王の同意なくアラゴン王太子と結婚し、約定を破った」という公式見解を表明した<sup>41)</sup>。

イサベルが、フランス王ルイ11世の弟ギューエンヌ公との結婚を断り、フェルナンドと結婚したことは、フランスを怒らせ、フランスをエンリケ派につかせることとなった。これは、大きな痛手であり、エンリケ派にイサベル攻撃の格好の口実を与えた。反面、ルイ11世と対立する、イングランド、ブルゴーニュ、アラゴン、そして新教皇シクストゥス4世がイサベル派支持にまわった。教皇特使アレッシンドロ・デ・ボルジアが、イサベル派擁護の立場で内戦に介入し、枢機卿位に野心のあるメンドーサ家、その縁戚であるベラスコ、ピメンテル家などがイサベル派に転向した。アラゴン派であるエンリケス家とトレド大司教のイサベル支持が不動であったのはいうまでもない。

これら一連のプロパガンダは、イサベル派を有利な立場に導く大きな一助となった。イングランド、フランス、ポルトガル、アラゴン王家が結婚の申し入れを行ったことは、それを示すものであろう。1470年、イサベルがアラゴン王太子と結婚したことで王位継承権を剥奪され、フアナが王位継承権を認められたことにより、フランス王弟は、フアナとの結婚を企図した。しかしその際、エンリケ4世とフアナ王妃の嫡出子宣誓を要求した。王と王妃、その周囲の貴族は、「大いに恥じ入りながら」まず王妃が「フアナは夫の娘である」、次にエンリケ4世が「フアナが誕生した時から、自分の娘であると感じてきた」と宣誓した<sup>42)</sup>。それにもかかわらず、その後、フランス王弟はフアナとの結婚を破棄し、結局フアナはポルトガル王家に嫁ぐこととなる。またポルトガル王アフォンソ5世のフアナ支援は、ポルトガル国内で不人気であったし、ブルゴーニュとイングランドはイサベル派と協定を結んだ。このことから、イサベル派が単なる少数勢力とみなされていなかったこと、また、その主張が広く浸透する一方、フアナ派の退潮が窺われる。

1474年12月時点において、イサベル派は、アラゴン王、メンドーサ家、アルバレス・デ・トレド

家、ベラスコ家、エンリケス家、ピメンテル家、キニョネス家、グスマン家、マンリケ家に、主要都市を数えるようになる。フアナ派を構成したのはポルトガル王、パチェコ家、トレド大司教<sup>43)</sup>、ポンセ・デ・レオン家、ストウニガ家などであった。フアナ派が軍事的優勢を保ったが、1477年までにポルトガル、カスティーリャ国内の不人気を一因として、フアナ派は瓦解を始める。

貴族はそれぞれの持つ政治イデオロギー的立場に基づいて行動していたのではなく、各家門の利害により活動していた。そのため王権対貴族のイデオロギー的対立という見解には、一定の修正が必要である。しかしプロパガンダの役割が少なくなかったことは、王と貴族が、時勢に応じて、同盟関係を変化させる際、各派の政治イデオロギーを活用したことから窺える。聖俗の貴族や主要都市を巻きこんだ王位継承争いの中で、「異教の王」「性的不能」「悪政」「エンリケ4世の結婚の非合法性」などという言説が拡散し、時代の支配的イデオロギーとして定着するに至ったのである。

### III 15世紀末における情報伝達のメディア

15世紀のメディアの特色として、羊皮紙から紙への文書素材の変化があげられる。ゲーテンベルクの印刷技術導入<sup>44)</sup>からも推察できるように、文字言語の重要性が増大した。俗語の普及により、表現も飛躍的に多様化した。15世紀は、前世紀と比較にならないほど、著作数が増大しており、13世紀の92作、14世紀の112作から、15世紀には、数千作以上の著作が書かれた<sup>45)</sup>。このような背景から、年代記、貴族間の公開回覧書簡、コブラや政治風刺寓意詩などは、文字に親しむ貴族や都市支配層への重要なプロパガンダのメディアであると考えられる。

年代記は、旧来のラテン語から俗語表記となり、その内容も具体的な政治的目的を持った党派的なものとなったが、それは特にエンリケ4世期において顕著である。パレンシア(1423-92年)は、エンリケ4世の刺客や投獄から逃れながら、その年代記の中でエンリケ4世の悪政、性的不能など、あらゆる側面から王を批判した<sup>46)</sup>。バレーラ(1412年生)も代表的な反エンリケ派年代記作者で、エンリケ4世

の反乱正当化の重要な担い手の一人であった<sup>47)</sup>。エンリケス・デル・カステリーヨ（1443-1503年）<sup>48)</sup>は、エンリケ派の年代記作者で、エンリケ4世の廃位論に対して、エンリケ4世の統治権の正統性を主張し、唯一「王妃の娘」に関する言及を避けている。

これら年代記作家は、書記官、国内外への使者であり、貴族の集会などで、政治的理念に関する討論の中心にいたるなど、幅広い活動をしていた。このことから、年代記作者が単なる歴史叙述のみをしていたわけではなく、彼らが書く年代記が多様な役割を担っていたことがわかる。

エンリケ4世期の文学作品の傾向として、これまで主流を占めていた、抒情詩、宮廷詩、武勲詩、道徳的な詩などに代わり、風刺詩など体制批判のジャンルの拡大が特徴的である。王が直接辛辣に風刺されたことが、前後の時代と比較すると大きな特色である。このことから、人々の「政治文化」への高い関心が垣間見られる。

主な作品として、イニゴ・ロペス・デ・メンドーサによる「修道院長の歌」<sup>49)</sup>、1464年の「ミンゴ・レブルゴの歌」<sup>50)</sup>、1467-68年の「キリスト者の人生の歌」<sup>51)</sup>などがある。イニゴ・ロペス・デ・メンドーサの作品が広く読まれたことは、その写本の多さから推察することができる<sup>52)</sup>。

著作家の多くは貴族であり、直接的に政治の中枢に関わっていた。政治批判の詩歌は、作成されるなりその周囲に発表され、公の場で、大きな声で読まれ、歌われた<sup>53)</sup>。このことから、体制批判の著作が作成された当時において、詩歌をとおしたプロパガンダの役割がいかに大きかったか、そして政治と文学の密接な相関関係があったことが理解できる。文学史料の政治史研究における重要性は、再評価されなければならない。

#### IV 宮廷と地方：王位継承問題と反領主反乱

このような政治的潮流とプロパガンダは、都市や「民衆」(pueblo, común) も無関係ではない。プロパガンダを利用した政治的動きは、支配者層に独占されていたわけではなく、様々な社会層で実践されていた。

エンリケ4世への批判である「法の軽視」は、幅広い意味で用いられているが、都市においては、「都市の同意なしの貴族への王領地の恵与」と理解されていた。都市のエンリケ4世に対する不満は、コルテスにおける諸都市の訴えから明確に読み取れる。

1442年バリャドリッドのコルテスにおいて、フアン2世に対する諸都市の請願「王とその未来の後継者は、王領地を貴族に恵与することはできない。恵与に対する反乱は、正当であるとみなされる」が承認された。1455年のコルドバのコルテス、1465年のサラマンカのコルテスにおいて、諸都市はエンリケ4世に対し、上記の請願の再確認を迫ったが、エンリケ4世は、それを無視し<sup>54)</sup>、王領地の恵与は増加の一途をたどった。

エンリケ派とイサベル派双方の主張は、王国全土に書簡を通して流布された。イサベルは、ギサンド条約破棄以降、大貴族の十分な支持を得られなかったことから、王国全土に書簡を送り、「1464年9月15日以降の恵与を解消し、こうした不必要な恵与をしない」<sup>55)</sup>と主張することにより、王領地の恵与に批判的な都市支配層をイサベル派に合流させた。

このように都市は、1468年まで不安定な動きをしていたが、それ以降、都市の多くがイサベル派支持にまわった。これに対しエンリケ4世は、フアン・パチェコ、アロ伯、ペドロ・ヒロンの支持を取り付けるため、貴族への恵与を増大させたのであり、多くの都市がエンリケ4世から離れた。

1469年のサラマンカとトルヒーリョ、1470年のメディーナ・デル・カンポ、1471年のビルバオ、1472年にパチェコへの恵与に反発したセプルベダ、アラランダ、アグレダ、モヤ、1474年にパチェコへの恵与に反発したトルデシーヤス、セゴビアなどはその一例である<sup>56)</sup>。地方についていえば、1469年ビスカヤ、エストウレマドゥーラは、ストウニガ家とアルバレス・デ・トレド家の抗争で二つに分かれており、イサベル派は後者を支持した。ムルシア、アストゥリアスなどは、当初よりイサベル派であった。

以上のように、宮廷政治と地方が政治状況に応じてしばしば結びつき、諸都市間の情報伝達も意外に早かったことがわかる。反領主反乱や都市内の抗争

は、これまでもみられたが、イサベル派支持というかたちを採って、都市内の抗争が王位継承争いと連動し、そういった中で、「民衆」の不満が表明されたのであった。

## V 宮廷プロパガンダと「民衆」：都市のオーラル空間における情報伝達の可能性

ポール・ズントールは、13世紀から都市空間における情報伝達が拡大し、15世紀から、集団の合意形成や情報の重要性が、意識されるようになったとしている<sup>57)</sup>。大半の人々が、文字ではなくオーラルでつながっており、オーラル言語が唯一の公的なコミュニケーションの手段であった。しかし、そのことが情報伝達を不可能にしていたわけではない。

宮廷から都市への情報伝達手段として注目すべきなのは、公開回覧書簡である。エンリケ4世がムルシアに宛てた1464年11月30日付けの書簡では、エンリケ4世が、アルフォンソ王子を王位継承者に指名している<sup>58)</sup>。1468年7月4日アルフォンソ王子の死去による、イサベルの王位継承の知らせ<sup>59)</sup>なども同様であり、以降もおびただしい書簡が王国全土に送付された。これら操作された書簡には、「広場、市場などの場所で知らせよう。この指示を知らなかったということのないよう」<sup>60)</sup>という但し書きがされていることが多く、王国全域の様々な住民への伝達が意識されていたと考えられる。

貴族による都市向けのプロパガンダは、最も重要である。「請願」は貴族だけに伝えられたのではない。1464年大貴族によるブルゴスでの評議会の際ビリェーナ侯は、教会、広場など人の集まる場所を巡回しながら、「王国を混乱させたり、都市に損害を与えたりするために来たわけではない」、「エンリケ4世は、為政者というより暴君である」、と住民、教区民に自説を開陳している。その上でエンリケ4世の「悪政と悪しき生活」を批判し、「それらを解決するために来たのだ」、と住民の支持を求めている<sup>61)</sup>。アビラの三文芝居事件前、エンリケ4世の廃位を正当化するプロパガンダは、バリャドリッド、アビラにおいて、ファドリケ提督により行われ、人々が「アルフォンソ12世」に同調すべく、事前のアジテーションによって周到に準備された<sup>62)</sup>。

1465年6月5日のアビラの三文芝居事件は、民衆向けの公開儀礼としての性格を持ち、アビラ市民またその他の地域の住民全員がよく見渡せるように、アビラの近くに舞台を設えた<sup>63)</sup>。この公開儀礼の主目的は、エンリケ4世への憎悪とアルフォンソ12世への敬愛を惹起することにあった。

この小劇では、住民にも理解しやすいような工夫が凝らされた。喪服を纏ったエンリケ4世の人形から、まずトレド大司教が「王に値しないため」と王冠を取り去り、次にビリェーナ侯が「公正な政治を喪失させた」と言いながら王笏を投げ捨てた。次にプラセンシア伯が、「王国の庇護者ではない」と述べながら王剣を奪い、ベナベンテ、パレデス伯が王のすべての象徴を取り除いた。最後にディエゴ・ロペス・デ・ストウニガが「王位と玉座を失うに値する」と主張しながら、エンリケの像を舞台から蹴りおとした。そこにいた人間はあたかも王が亡くなったかのように泣いた。その後すべての聖職者と騎士によってアルフォンソ王子が舞台に上げられ、大声で「アルフォンソ王のカスティーリャ、カスティーリャ!」と歓呼の声をあげた。トランペットが吹き鳴らされ、居並ぶ騎士たちは、新王の手に接吻をした<sup>64)</sup>。

エンリケ4世の像に喪服を着せ、皆で泣く「葬式」が行われたのは、「もし反乱が成功しない場合、王国を解放するため、暴君を殺すしかない」というトマス・アクィナスの神学的イデオロギーに基づくものである<sup>65)</sup>。このことは数日の内にカスティーリャ、レオン、アンダルシアへと広まった<sup>66)</sup>。二人の王の存在に、王国は混乱した。パレンシアは、「アルフォンソ王は、正統な王であるが富を持たなかった」「強欲な民衆は、エンリケ4世の富をみて、蜜にたかる蠅のようにエンリケ派に集まった」<sup>67)</sup>と記述している。

王自身によってもプロパガンダは行われた。1467年オルメドの戦いの前、エンリケ4世はオルメドに赴き、アルフォンソ派住民を懐柔しようとした<sup>68)</sup>。同年エンリケ4世のマドリッド滞在中も住民が大声でエンリケ4世称揚、反乱貴族批判をしている<sup>69)</sup>。1468年ペドロ・デ・シルバ、バダホス司教がエンリケ派として行動を起こし、トレドもエンリケ4世

称揚の声をあげた<sup>70)</sup>。

高位聖職者もまた貴族と同様に王位継承抗争において、いくつかの党派に分かれ争った。彼らは貴族と親族であることが多く、宮廷政治に深く関わっていた。各党派の主張を練り、それを流布させた聖職者の政治プロパガンダに果たした役割は大きい。説教師を通じ「民衆」への情報媒体としても重要な役割を担ったのである。

説教師は、民衆に対しては、説教を通して、自派の主張を広めた。説教は、種本をもとに、主に道徳的改悛のメッセージを都市民に向けて発信していた。しかし種本には基本的な組み立てが書かれていて、状況と場合によって説教師の意思によって時流に沿った説教ができるようになっていた<sup>71)</sup>。

1464年ブルゴス評議会の後、クエンカ司教によって、きわめて辛辣なエンリケ批判と説教がなされた。一方、敵方の絶え間ない批判への反論は、エンリケ4世側ではこの時点において未だ練られていない<sup>72)</sup>。ようやく1467年、エンリケス・デル・カステリーヨが以前行った演説が、ディエゴ・アリアス師をはじめとするエンリケ4世支持者により、流布されるようになる<sup>73)</sup>。1471年5月メディーナ・デル・カンポにおいてアラス枢機卿による反イサベル・プロパガンダもなされた。トレド大司教、セビーリャ大司教、サンティアゴ大司教、ブルゴス、コリア、シグエンサ、オロペーサなど多くの司教がこれに参加したため、各司教区内における説教を通じてのプロパガンダがあったことが推察できる。

中世社会において、噂は、重要なプロパガンダの手段であった。貴族の作為的言説を淵源とする噂は、様々な社会集団の間に広く浸透したのである。

1464年のアビラの三文芝居事件によるエンリケ4世の廃位、「アルフォンソ12世」即位の噂は、カステリーヤ、レオン、アンダルシアに広く知られた。事件直後は、大方の地域で「アルフォンソ12世万歳！」の歓呼があがり、エンリケ派貴族が住民によって追放された。

もちろんすべての地域がアルフォンソ派だったわけではない。反乱派の横暴に揺れたエンリケ派の地域では、城門や貴族の館の前で、辛辣な反乱貴族批判のコプラが、住民により大声で歌われた。シマン

カスでは、イスラムの侵略による「スペイン喪失」の原因となったフリアン伯の兄弟オーパスの人形をトレド大司教に見立て、「反逆者」などと罵倒し、火の中へ投げ入れ「死ね、死ね、王を捕えた反逆者たちよ！」と叫んだ。その影響を受けて、バリャドリッド、ビリャルバでも「アルフォンソ王子は提督の傀儡である。エンリケ4世が秩序を保証してくれる」という噂が流れ、エンリケ4世支持派として武装した<sup>74)</sup>。1466年には、貴族がエンリケ、アルフォンソ両方の弱体化を画策しているとの噂が流れた<sup>75)</sup>。

パレンシアは、エンリケ4世がフアナ王妃との初夜に失敗したことなどの、諸都市に広まった噂は、まもなく愚弄と嘲笑へと変化していった、と記している<sup>76)</sup>。エンリケ4世とフアナの初夜は、ブランカ・デ・ナバーラの時と同様に失敗したというバラードが通りで歌われたとのドイツ人旅行者の証言もある<sup>77)</sup>。

年代記作者バレーラによれば、「フアナが何者であるかについての民衆の声を軽視してはならない。なぜなら民衆は神の声を持っており、それは真実の泉だからである」<sup>78)</sup>とした。つまり、エンリケ4世の性的不能も、「民衆」がそう信じているなら、それが真実になると考えられていた。そのことから「民衆」へのプロパガンダの結果生じた認識には、一定の社会的評価がなされた。「民衆」の声は、社会の総意の表明とみなされ、制度化されて、歴史的事象を確証する役割を担ったのである。

噂の作者である貴族たちの大部分が、反エンリケ派から親エンリケ派へ移行した後も、噂は共通感情として存続し、下から影響し続けた。実際「民衆」の動きは、「民衆」の反乱、ひいては「民衆」によるアルフォンソ、イサベル歓呼につながっていくのであり、「民衆」向けプロパガンダもまた、王位継承問題に関わりを持つことが確認できるのである。

「民衆」は歓呼を通して、プロパガンダに参加した。1465年のアビラの三文芝居事件<sup>79)</sup>は、事前に喧伝され、その舞台を見に、アビラの住民すべてが集まった大掛かりなプロパガンダであった。このような「王の死」と新王の即位には、「民衆」の歓呼による同意が必要である。そのため反乱派の貴族は、



前もって「民衆」に説明、説得し、住民の歓呼を得たのである。1474年にイサベルがセゴビアで即位した際も、セゴビアはすでにイサベル派となっており、イサベルは住民の「歓呼」の中で戴冠した。このように王の戴冠の際には、「民衆」の同意の歓呼が演じられた。

政治において「民衆」は疎外された存在ではなく、受動的とはいえある程度情報に通じていたといえる。各都市では貴族や市参事会、説教師が情報発信者としての役割を担ったばかりではない。人々が集まり情報交換をする広場、教会、市場、領主の館、居酒屋、公衆浴場、洗濯場や泉などがあり、祝祭を通じて住民の隣人関係も強化された。祝祭(シャリヴァリ)では、「愚弄の王」「偽司教」が選ばれ、政治批判が行われて、有力者が嘲笑された。都市の規模は概して小さく、濃密な人間関係が維持されたことから、情報伝達のスピードも速かったとが推察される。

このことから、受動的な情報が中心であるものの「民衆」の間でも、迅速で濃密なコミュニケーションが行われ、「政治文化」との接点があったと考えられる。

「民衆」は、人口の大部分を占めていたが、カスティーリャ中世史において最近まで政治的意志があるとはみなされておらず、曖昧な社会層として理解がされてきた。しかし15世紀末において、「集団心性」として曖昧視されてきた「民衆」の意識<sup>80)</sup>は、ある程度具体性を帯びてくる。「民衆」は政治情報の受信者にとどまらず、前述した広場や市場、洗濯場などを介して、加工した政治情報を発信したのである。

14～15世紀には、都市における教会の思想・文化の独占が終焉しつつあった。13世紀までは修道院付属の学校が中心であったが、やがて世俗の学校<sup>81)</sup>が多数つくられた。13世紀に創設された大学<sup>82)</sup>は、15世紀にその数を増やし、学生数も飛躍的に上昇した。15世紀には幅広い知への関心が深まり、「エリート文化」と「民衆文化」の二項対立が崩れ、二つの文化の相互浸透が顕著になる<sup>83)</sup>。

アルフォンソ11世によるレヒドール制の導入と寡頭政治体制の強化により、都市官職は下級貴族や

有力市民に独占され、社会対立が激化する<sup>84)</sup>。下級貴族や有力市民による寡頭政的支配下に置かれた都市「民衆」とはいえ、決して一枚岩ではなく、様々な利害対立を内包していた。しかし彼らは主に情報の受信者として、ある種の一体感を保持しており、ブルゴスなどでは「民衆」による住民集会さえ開催された。この住民集会は寡頭支配層の独占する市参事会への「圧力団体」として機能し、住民集会代表は「民衆」の声を市議会へ伝え、その意思を代弁したのである。

セプルベダは、エンリケ4世の圧力に屈せず、イサベル派として反乱に加わった都市の好例である。エンリケ4世が、1466年<sup>85)</sup>から1472年まで2度にわたり財産没収を宣言して服属を求めたが、その要求に屈することはなかった。

1472年の国王文書によれば「……ディエゴ・ロペス・デル・エンシーナ、フェルナンド・ビジョシージョ、ヌーニョ・ヌーニェス、ロペ・フェルナンデス、ペロ・マルティネス・デ・ラ・オサ、アンドレス・デル・オリバ、レヒドール・アンドレス・パジャン、下級貴族のプロクラドール・フェルナンド・デ・ペドラサ、住民代表(procurador de los vecinos)フェルナンド・エスクデーロ、ルイス・ゴンサレス、その息子アルバロ・デ・セプルベダ、フェルナンド・デ・カピージャス、フェルナンド・デ・ペニャランダ、書記官フルートス・ゴンサレス、ディエゴ・フェルナンデス・カレロ、アルバロ・ロドリゲス、ガルシア・デ・アガージョ、フルートス・デ・オリバ、ペロ・ゴンサレス・デル・アラメダ、アルバロ・デル・コラルは、セプルベダにおいて、アビラ住民のペロ・ダビラと私(エンリケ4世)の憎く、不審な敵であるシチリア王(フェルナンド)の配下のものとともに、王に対して反抗し、反乱を起こし、重大で醜悪な罪を犯した。これらの罪は大変重く、セプルベダ内外の動産、土地と建物、地代、永代所有権は没収の罰に値する……サンティアゴ騎士団長フアン・パチェコと王を敬い、支持することを命じる……」<sup>86)</sup>。

この文書から、アラゴン王フェルナンド、貴族、下級貴族、住民などが一体となって制度の対立を超えて反乱に参加した一例<sup>87)</sup>が浮かび上がる。

「公益」、「王国の平和」は、中世末期において行為や権力を正当化する表現として頻繁に利用される。それが含意するのは、中世末期の権力が裁判権のみならず、「民衆」の支持、「民衆の声」に支えられ、それを不可欠の一部として組み込まざるをえなかったということである。

## おわりに

イサベル1世の即位は単なる宮廷クーデターではなく、伝統的方法論や視点だけでは十分に説明することはできない。それを説明するには、「民衆」と「民衆」向けの政治プロパガンダという媒介変数が不可欠である。「民衆」の社会心性史的視点を導入して、伝来史料を読み解き、新たな全体像を模索する必要もあろう。

エンリケ4世は、軍事力で反乱貴族を抑えるほどの力を持っておらず、反乱勢力も不安定である。エンリケ4世はプロパガンダを軽視し、恵与によって支持を拡大しようとした一方、反乱派は、当初から、考え抜かれたプロパガンダを浸透させる努力を怠らなかった。ここに、反乱派の勝利の一因があるのではないだろうか。

13世紀のサンチョ4世の父王への反乱、14世紀のトラスタマラ革命においては「現王の廃位と王位簒奪」を求める軍事的勝利後になって、権力の正当性を確保するための「プロパガンダ」が行われた。そしてそれが一定の意義を持ったとみなされてきた。しかし、エンリケ4世の王位継承争いの場合、まずプロパガンダが行われ、イサベル派による主張が正統であるイメージを浸透させた後、1475年軍事衝突に至った。積極的にプロパガンダを行ったイサベル派が勝利を収めたことから、プロパガンダが重要な役割を果たしたことが確認できる。

以上の検討から、反エンリケ4世の政治プロパガンダが、有効であったことは否定できない。反乱派貴族が「フアナこそ正統な王位継承者であった」と述懐していることから、イサベルが持つ正統性の基盤の脆弱性は明らかである。またカトリック両王の支配体制は、エンリケ4世の政治方針を継承しており、エンリケとイサベルの支配に質的差異があったとは思われない。

プロパガンダという観点から考察することは、記述史料に明確に表れない「インフォーマルな権力」に注目することを意味する。反エンリケ4世政治プロパガンダは、一定の条件下において、プロパガンダが政治・社会的に大きな影響力を行使した好例といえよう。

- 1) Sitges, J. B., *Enrique IV y la excelente señora, llamada vulgarmente doña Juana la Bertraneja (1425-1530)*, Madrid, 1912.
- 2) Marañón, G., *Ensayo biológico sobre Enrique IV de Castilla y su tiempo*, Madrid, 1930. エンリケ4世の性的不能についての、医学的視点からの最新研究に Botella Llusá, J., "Personalidad y perfil endocrino de Enrique IV", *Enrique IV de Castilla y su tiempo. Semana de Marañón*, Valladolid, 2000, があるが、同様の結論が出されている。
- 3) 主要なものとして Vicens Vives, J., *Historia crítica de la vida y reinado de Fernando el Católico*, Zaragoza, 1962; Torres Fontes, J., "La contratación de Guisando", *Anuario de Estudios Medievales*, 2, 1965; Azcona, T., *Isabel la Católica. Estudio crítico de su vida y su reinado*, Madrid, 1964; Suárez Fernández, L., *Matrimonio y derecho sucesorio Isabel la Católica*, Valladolid, 1960; idem, "En torno al pacto de los Toros de Guisando", *Hispania*, 23, 1963; idem, *Los Reyes Católicos. La conquista del trono*, Madrid, 1989; Del Val Valdivieso, M. I., *Isabel la Católica. Princesa (1468-1474)*, Valladolid, 1974, など。
- 4) 1455年5月20日のエンリケ4世とフアナ・デ・ポルトガル、1469年10月19日のイサベルとフェルナンドの結婚は、教皇の承認が得られていない。
- 5) メディーナ・デル・カンポの裁定における、エンリケ4世と「アルフォンソ12世」の和解と破棄。1468年9月19日のギサンド条約調印とオカーニャのコレテスにおける破棄をさす。
- 6) 王権とトレド大司教、フアン・パチェコ、メンドーサ家を中心とする各党派は、頻繁にその同盟者を変えていった。
- 7) フアン2世は1454年7月8日に遺言書「エンリケ、アルフォンソ、イサベルという順で、王位は継承されるべし。以下それぞれの正統な後継者が王位を継承すべし」を残した。エンリケ4世は、1464年12月4日「父王フアン2世の遺志に従い、アルフォンソを王位継承者とする……」(Archivo Histórico Nacional. 以下AHN., と略記。Frías, 664/15) 旨の文書を作成したが、後に撤回している。エンリケ4世は1474年12月12日、

- 遺言で、フアナを王位継承者としたが、その遺言も無視され、イサベルが即位した。
- 8) Suárez Fernández, L., *Nobleza y monarquía*, Valladolid, 1975.
  - 9) Nieto Soria, J. M., *Ceremonia de la realeza: propaganda y legitimación en la Castilla Trastámara*, Madrid, 1993; idem, *Orígenes de la Monarquía hispánica: propaganda y legitimación (ca.1400-1520)*, Dykinson, 1999; idem, "Propaganda política y poder real en la Castilla Trastámara: una perspectiva análisis", *Anuario de Estudios Medievales*, 25/2, 1995, pp.489-516; idem, "Los fundamentos ideológicos del poder regio", *Isabel la Católica y la política* (ed. Julio Valdeón Barquero), Valladolid, 2001, pp.181-216; Carrasco Manchado, A. M., *Discurso político y propaganda en la corte de los Reyes Católicos (1474-1482)*, tesis doctoral, 2 tomos, Universidad Complutense, 2000.
  - 10) Suárez Fernández, L., *Nobleza y Monarquía*, Valladolid, 1975; Del Val Valdivieso, M. I., *Isabel la Católica*; idem, "Los bandos nobiliarios durante el reinado de Enrique IV", *Hispania*, 130, 1975.
  - 11) Nieto Soria, J. M., "La avisación de la dignidad real en el contexto de la confrontación política de su tiempo", *Pensamiento medieval hispano. Homenaje a Horacio Santiago-Otero* (co. José María Soto Rábanos), I, Zamora, 1998, pp.405-437.
  - 12) *Cortes de los Antiguos Reinos de Castilla y León*, Madrid, 1866, III, p.457.
  - 13) Nieto Soria, *Ibid.*, pp.405-437.
  - 14) Torres Fontes, J., *Estudios sobre la "Crónica de Enrique IV" del Dr. Galíndez de Carvajal*, Murcia, 1946, cap.XLII (以下 *Crónica* と略記).
  - 15) Palencia, A., *Crónica de Enrique IV*, Madrid, 1973, Decada I, Libro VI, cap.VI (以下 *Crónica* と略記).
  - 16) Palencia, A., *Crónica*, Decada I, Libro VI, cap.VI.
  - 17) Torres Fontes, J., *Crónica*, cap.XLII.
  - 18) フアナ・エンリケスは、アラゴン王フアン 2 世の王妃であり、アラゴン王フェルナンド 2 世の母親。トレド大司教アルフォンソ・カリリーヨの庶子トロイルは、ナバーラ総司令官のピエール・ペラルタの庶子と結婚しているためである。
  - 19) AHN., Frías, 690/11. ベナベンテ伯, ブルゴス司教, ペドロ・ヒロンも加入「王位が正統でない者に渡らないよう, 我々のできる方法で, 正統な王位継承者へ渡すものである……」。
  - 20) デ・ラ・クエバはメンドーサ家の姻戚で, 1460年以降一貫してエンリケ派。
  - 21) Valera, D., *Memorial de diversas hazañas*, Madrid, 1941, cap.XCVII (以下 *Memorial* と略記).
  - 22) Valera, D., *Memorial*, pp.487-488.
  - 23) Palencia, A., *Crónica*, Decada I, Libro VII, cap.II, "La exacción de 800.000 ducados por la Bula de cruzada, parte consumidos en torpes empleos y parte encerrados en el real tesoro; lo ignominioso de la guerra que se había hecho, y los exorbitantes gravámenes que sobre los pueblos pesaban. Terminó haniendo mención de D. Beltrán y del deseo de D. Enrique de verle elevado por autoridad apostólica al Maestrazgo de Santiago, y aseguró que, si tal cosa se otorgaba, bien podía prepararse España entera a ver aumentadas en proporción enorme las calamidades que la afligían".
  - 24) Torres Fontes, J., *Crónica*, cap.LIII.
  - 25) Torres Fontes, J., *Crónica*, cap.LXXXIV.
  - 26) AHN., Frías, 664/18. ベルトラン・デ・ラ・クエバのサンティアゴ騎士団長位の放棄の文書が, 1464年12月13日に出された。「この年の末まで, ベルトラン・デ・ラ・クエバが保有していた, サンティアゴ騎士団長位を放棄しなければならない……」。
  - 27) AHN., Frías, 13/5, 15/13, 16/5. 1464年12月4日カベソン「余(エンリケ 4 世)の治世の後に起こりうるすべての王位継承に関する醜聞の材料を回避するため, 神への奉仕として以下の準備をする。王国の正統な後継者は余の弟アルフォンソ王子以外の何者でもない。この文書に基づき, すべての聖職者や騎士が, カスティーリャとレオン王国の長子であり後継者に, 余の父, 栄えあるフアン王が王国の古い慣習に従ってしてきたように, 忠誠を誓うことを懇願, 要請する……」。
  - 28) Torres Fontes, J., *Crónica*, cap.LXIII, "su alteza les avia dado para seguridad de sus estados al principe don Alonso su hermano, y que ellos lo tenían con aquel acatamiento que a todo principe se devia tener, y lo servían con aquella reverencia que se devia, pero su alteza los perseguía y venía contra ellos con mano armada pidiéndoles cosas injustas. Por tanto, que humildemente le suplicava que no quisiese molestarlos ni estrecharlos, y que pues ellos como subditos se arredaban y huían de su ira, que su alteza no los quisiese mas perseguir ni ir contra ellos, y donde aquellos no acastase para aplacar su indignacion, tomando a Dios por testigo, se despidían de su servicio, y que le suplicavan no quisiese casar a la infanta doña Isabel su hermana con el rey de Portugal sin grado y consentimiento de los tres estados de su reino".
  - 29) Torres Fontes, J., *Crónica*, cap.LXX.

- 30) Palencia, A., *Crónica*, Decada I, Libro VIII, cap.VIII.
- 31) Torres Fontes, J., *Crónica*, cap.LXXX.
- 32) Palencia, A., *Crónica*, Decada I, Libro X, cap.III.
- 33) Torres Fontes, *Crónica*, cap.LXCV.
- 34) AHN., Frias, 661/30. 1468年4月23日の「アルフォンソ12世」による命令など、その他多数。
- 35) AHN., Frias, 16/21, 16/9. 1468年9月15日バエサのサン・ガブリエル教会の前で読み上げられた「周知のように、4年間に及ぶ醜聞と王国の分裂と耐えがたい災難と損害があり、余（エンリケ4世）はこれらを取り去り、平和を与えようとしたが、神のご加護により余の愛する妹であるイサベルがカダルソへ余に会いに来るまでは如何なる解決をすることもできなかった。そこでトレド大司教、セビーリャ司教アロンソ・フォンセカ、サンティアゴ騎士団長フアン・パチェコ、プラセンシア伯アロンソ・ストウニガ、ミランダ、ペナベンテ、オソリオ伯、ブルゴス、コリア司教、ゴメス・マンリケ同席の下、レオン司教であり、教皇特使であるベネリスの介入により、イサベルは余を正統な王であると認め、服従すること……、そしてイサベルの王位継承権を承認する……」。
- 36) AHN., Frias, catálogo 13, n.15 (pub. por Del Val Valdivieso, M. I., *Isabel la Católica, princesa (1468-1474)*, Valladolid, 1974, p.365). "*queriendo proveer como estos reynos non ayan de quedar nin queden sin legitimos subçesores del linage del dicho señor rey... e jurada e nonbrada e subçesora en estos dichos reynos e señorios... la reyna doña Juana de un año a esta parte non han usado linpiamente de su persona como cunple a la hora del dicho señor rey nin suya, e asy mismo el dicho señor rey es informado que non fue nin esta legitimamente casado con ella... Iten es acordado e asinado que la dicha señora infanta mediante la gracia de Dios haya de casar e case con quien el dicho señor rey acordare e determinar de voluntad de la dicha señora infanta, e de acuerdo e consejo de los dichos arzobispo (de Toledo) e maestro (de Santiago) e conde (de Plasencia), e non con otra persona alguna...*".
- 37) *Documentos referentes a las relaciones con Portugal durantel el reinado de los Reyes Católicos*, vol.I, Valladolid, 1958, p.59.
- 38) Torres Fontes, J., *Crónica*, cap.CXV.「アルフォンソ王の死去の後、私（イサベル）が即位できたが、兄王への愛情と王国の平和のために即位を放棄した。私は真正なる王位継承権を有することを知っており、教皇特使ベネリス殿下の仲介を得て、多くの大貴族、聖職者が居並ぶカダルソとセルベロスで行われた会見により、王位継承者として承認された。その後フランス王弟との結婚を退け、シチリア王フェルナンドと結婚したのは、それが王国の平和により適合していたからである……確かにギサンド条約に記されている、王とビリエーナ侯、プラセンシア伯の同意なしに結婚したが、この結婚はトレド大司教と教皇特使ベネリスのご臨席のもと行われた。いずれにしてもこの結婚は、王位継承権剥奪となんの関係もないものである……」。
- 39) Torres Fontes, J., *Crónica*, cap.CXXI.
- 40) Torres Fontes, J., *Crónica*, cap.CXXII.
- 41) Torres Fontes, J., *Crónica*, cap.CXXIV.
- 42) Torres Fontes, J., *Crónica*, cap.CXXIV.
- 43) トレド大司教は、フェルナンドの縁戚であるエンリケス家のイサベル派における影響力拡大を不服とし、フアナ派へと変節した。
- 44) Suárez Fernández, L., *Enrique IV de Castilla. La difamación como arma política*, Barcelona, 2001, p.455.
- 45) Viña Liste, J. M., *Cronología de la literatura española. I. Edad Media*, Madrid, 1991.
- 46) Palencia, A., *Crónica...*, Decada I, pp.81-251, Decada II.
- 47) Valera, D., *Memorial...*, cap.VII-cap.C.
- 48) Enriquez del Castillo, E., *Crónica de Enrique IV*, Valladolid, 1994. (以下 *Crónica* と略記)
- 49) *Poesía de Cancionero* (ed. Alvaro Alonso), Madrid, 1999, pp.37-38. ある修道会の修道院長が、各修道院を訪れ、聖職者の腐敗を暴く展開の中で、エンリケ4世の治世と大貴族の腐敗を重ねて批判する。
- 50) Pulgar, F., *Letras. Glosa a las coplas de Mingo Revulgo*, Madrid, 1958; Rubio Tovar, J., *La prosa medieval*, Madrid, 1990; *Poesía de Cancionero*, p.37; Pedraza Jiménez, F. B., *Manual de literatura española. I, Edad Media*, Navarra, 1981, p.727; Mackey, A., "Ritual and Propaganda in Fifteen-Century Castilla", *Past and Present*, 107, 1985, pp.3-42. 寓意を用いて、王国の無秩序を批判した。羊飼いのミンゴ（民衆）が預言者兼羊飼いであるヒル・アリバトに羊飼いの間の不満（王国の惨状）、羊飼いの頭のカンダウロ（エンリケ4世）の無能、同性愛、性的不能と、狼（貴族）による被害を訴える。
- 51) *Poesía crítica y satírica del siglo XV* (ed. Julio Rodríguez Puértolas), Madrid, 1989, p.23. エンリケ4世を中心に、フアナ王妃、フアン・パチェコ、ペドロ・ヒロン、ベルトラン・デ・ラ・クエバ、トレド大司教、プラセンシア伯などが批判されており、民衆の不満、この時期の不安定な情勢、キリスト教的道徳の軽視が描かれている。
- 52) *Ibid.*, p.219. 1485年以降からも40版が残されており、

- 長く模倣され続けた。「修道院長の歌」で非難された家系は、異端審問の圧力の下、非常に脅威を感じた。
- 53) Manrique, J., *Poesía* (ed. Beltrán, V), Barcelona, 2000, p.3.
- 54) Del Val Valdivieso, M. I., “Resistencia al dominio señorial durante los últimos años del reinado de Enrique IV”, *Hispania*, 34, 1974, pp.53-104.
- 55) Del Val Valdivieso, M. I., “Resistencia”, p.53.
- 56) Torres Fontes, J., *Crónica*, cap.XVI-CLV; Del Val Valdivieso, M. I., “Resistencia”, pp.63-104; Esteban Recio, A., *Las ciudades castellanas en tiempos de Enrique IV: Estructura social y conflictos*, Valladolid, 1985.
- 57) Zumthor, P., *La medida del mundo*, Madrid, 1993, p.60.
- 58) Torres Fontes, J., *Crónica*, Carta XXXIV.
- 59) Torres Fontes, J., *Crónica*, Carta XXXIX.
- 60) Torres Fontes, J., *Crónica*, Carta XXXIII など。“E porque venga a noticia de todos o dellos e no podades nin puedan pretender inorancia diciendo que lo non sopistes nin vino a vuestras noticias, mando a vos, los dichos justicias, e a cada uno de vos, que lo fagades asi pregonar publicamente por las plaças e mercados e otros lugares por pregonero e ante escrivano publico, porque venga a noticias de todos e dello...”.
- 61) Torres Fontes, J., *Crónica*, cap.LVIII.
- 62) Torres Fontes, J., *Crónica*, cap.LXIV.
- 63) Torres Fontes, J., *Crónica*, cap.LXV.
- 64) Torres Fontes, J., *Crónica*, cap.LXV.
- 65) Black, A., *Political thought in Europe, 1250-1450*, Cambridge University Press, 1996, p.234.
- 66) Torres Fontes, J., *Crónica*, cap.LXVI.
- 67) Torres Fontes, J., *Crónica*, cap.LXVIII. “pues no aprovechava la subliminación del rey moço, si solamente con el nombre de rey se contentava, como quiera que la verdadera subliminación seria la victoria, ca siempre los vencedores reziven corona, e ya el derecho estava en las armas, las quales sin dilacion ni tardanza se devian tomar y poner en obra porque el favor de los pueblos es muy mudable, ya la gente castellana muy cobdiciosa, y siguieron al rey don Enrrique conociendo sus tesoros, y el abriendo la mano, los pueblos se irian a el como las moscas a la miel que aunque el rey don Alonso tiene justicia...”.
- 68) Torres Fontes, J., *Crónica*, cap.LXXXVII
- 69) Torres Fontes, J., *Crónica*, cap.LXCIV. アビラの三文芝居事件直後はアルフォンソ派であったトレドも、エンリケ派貴族の働きにより「エンリケ王万歳! 死ね反逆者ども!」の歓呼をあげるに至った。
- 70) Torres Fontes, J., *Crónica*, cap.LXCVIII.
- 71) Sánchez, M. A., *Un sermonario castellano medieval*, vol.1, Salamanca, 1999, p.141. Cátedra, *sermón, sociedad y literatura en la Edad Media. San Vicente Ferrer en Castilla (1411-1412)*, Salamanca, 1994.
- 72) Torres Fontes, J., *Crónica*, cap.LIX.
- 73) Torres Fontes, J., *Crónica*, cap.LXXXIV.
- 74) Torres Fontes, J., *Crónica*, cap.LXXVI.
- 75) Palencia, A., *Crónica*, Decada I, Libro IX, cap.IV.
- 76) Palencia, A., *Cronica*, Decada II, Libro III. cap.X.
- 77) Münzer, J., *Viaje por España y Portugal en los años de 1494 y 1495*, Madrid, 1991.
- 78) Pulgar, H., *Letras. Clasicas castellanas, la lectura*, Madrid, 1929. “la señora vuestra sobrina, hija incierta del Rey don Enrique y que vos tomáis por mujer, de lo cual no pequeña estima se debe hacer, porque la voz del pueblo es divina, y repugnar lo divino es querer con flaca vissta vencer los fuertes rayos del Sol”.
- 79) Enriquez del Castillo, D., *Crónica*, p.168; Valera, D., *Crónica de los Reyes Católicos*, Madrid, 1927, p.99; Palencia, A., *Crónica*, p.168; Torres Fontes, *Crónica*, p.239; *Crónica anónima de Enrique IV de Castilla*, 1454-1474, tomo II, Madrid, 1991, pp.161-163.
- 80) Menéndez Pidal, R., *Los españoles en la historia*, Madrid, 1982, p.155. その他アナール学派の心性史における民衆の扱いとして, Duby, G., “L’histoire des mentalités”, *L’Histoire et ses méthodes*, Paris, 1961, pp.937-966; Aries, P., “La historia de las mentalidades”, *La nueva historia*, Bilbao, 1988, pp.460-481.
- 81) Monsalvo Antón, J. M., *La baja Edad Media en los siglos XIV-XV. Política y cultura*, Madrid, 2000, p.181. 世俗学校は、元々財産目録作成や商人が商売をするために必要な知識を得るために創設されたが、15世紀において目的が多様化した。世俗学校としてはサンティアゴ、オビエド、レオン、アストルガ、サアグーン、サモラ、パレンシア、サラマンカ、バリャドリッド、ブルゴス、ブルゴ・デ・オスマ、セゴビア、セブルベダ、アビラ、クエリャル(学生数200人)、アルカラ、シグエンサ、トレド、クエンカ、コルドバ、セビージャ、マドリガルなどが設立された。
- 82) サラマンカ大学(1218年)は、15世紀末学生数3000人。バリャドリッド大学(1316年)は、15世紀初頭学生数200人。15世紀末期には、その他17大学が設立された。貧しいイダルゴのための奨学金も多く出された。
- 83) Monsalvo, *op.cit.*, p.218.

- 84) Del Val Valdivieso, M. I, "Aspiraciones y actitudes socio-político. Una aproximación a la sociedad urbana de la Castilla bajomedieval", *La ciudad medieval*, Valladolid, 1999, pp.217-222.
- 85) AHN, Frías, 10/15. 「王。私の送ったコレヒドールに従うことは、私を喜ばせ、満足させる……」。
- 86) AHN, Frías, 7/13. "*Diego López del Encina, Fernando Villosillo e Nuño Núñez e Lope Pedraza, procurador de los hidalgos, e Gernando Escudero, procurador de los comunes, e Luys González, e Alvaro de Sepúlveda, su hijo, e Ruy Díaz e Ruy Sánchez, e Juan Núñez de Sepúlveda e Fernando de Capillas, e Fernando de Peñaranda, e Frutos Gonzáles, escribano ... por cada uno dellos al tiempo que se alzarón e rebelaron contra mi en Sepúlveda e recibieron e acogieron e apoderaron en ella a Pero*

*Dávila, el mozo, vecino de la ciudad de Avila, con otras gentes del rey de Sicilia, rey extraño, a mí enemigo e odioso e sospechoso, ellos e cada uno dellos incurrieron en mal caso e en otras muy graves e grandes penas e merecieron perder e perdieron por ello todos sus bienes muebles e raíces e heredamientos e rentas e juro e oficios que de mí avían e tenían e ler pertenecían... Por ende, acatando los muchos e buenos e leales e señalados servicios que vos, el mi bien amado don Iohán Pacheco, maestre Santiago, me evedes fecho e fadades de cadadía, e los muy grandes trabajos e afanes que avéys tomado y tomáys por el sostenimiento de mi real persona e estado...".*

- 87) 1472年、エンリケ4世がセブルベダに入市しようとした際、住民は一丸となり、投石と矢を放ち妨げた。